

形（菊池寛）

山内 貴弘、若杉 良、元川 袈耶子、船越 香織

一 作者と作品について

菊池寛は、一八八八年に香川県高松市に生まれた。東京高等師範学校に入学するも、厳格な校風に反対し除名。その後も明治大学、早稲田大学などに籍を置いていた期間もあった。一九一〇年、第一高等学校に入学。同期に芥川龍之介、久米正雄らがいた。しかし卒業直前に友人の窃盗の濡れ衣を着せられて退学。改めて京都大学文学部英文文学科に入学し、上田敏に師事した。一九一四年、芥川・久米らが第三次「新思潮」に同人として参加。一九一六年の第五次「新思潮」にも参加し、戯曲『屋上の狂人』、『暴徒の子』らを発表。大学卒業後も『無名作家の日記』、『青木の京』、『恩讐の彼方に』などを続々発表、作家としての地位を確立した。一九一九年、芥川龍之介と共に大阪毎日新聞社の客員となり、『藤十郎の恋』、『友と友の間』などを発表。その後も執筆活動の傍ら、一九二三年に私費で雑誌、『文藝春秋』を創刊、一大出版社へと成長させた。また後進の育成のために芥川賞、直木賞を創設した。一九四八年、満五九歳で死去。

『形』は「大阪毎日新聞」で大正九年一月二日附紙上に発表された。のち、『極楽』、春陽堂版『菊池寛全集』第三卷、平凡社版『菊池寛全集』第二卷、改造社版『菊池寛全集』第三卷、中央公論社版『菊池寛全集』第二卷に収められた。

教科書には、一九六六年に大阪書籍『中学国語二年』で初めて採用された。その後も様々な教科書会社で採用され、二〇〇六年には三社（東京書籍、三省堂、教育出版）が採用していた。しかし、二〇一二年では教育出版のみの採用となった。

二 叙述について

摂津半国の主であった松山新介の侍大将中村新兵衛は、五畿内中国に聞こえた大豪の士であった。

「摂津」は今の大阪府の一部と兵庫県の一部。「侍大将」は、兵を統括する役職である。「五畿内」は近畿地方中央部の古称。山城・大和・河内・和泉・摂津の五国。「中国」は中国地方をさす。「聞こえた」とあることから、この地方にいれば、知ろうと思っていなくても誰でもその名を知っていたほど、有名な人物であることがわかる。「大豪」は、極めて強い大豪傑ということ。

そのころ、畿内を分領していた筒井、松永、荒木、和田、別所など大名小名の手の者で、「槍中村」を知らぬ者は、おそらく一人もなかっただろう。

「槍中村」は、それほど有名であったことがわかる。

それほど、新兵衛はそのしごき出す三間柄の自身の槍の矛先で、先駆けしんがりの功名を重ねていた。

「それほど」とは、槍中村と言われるほど。「三間柄」は長さ三間(約五・四メートル)の柄。「先駆けしんがり」は、戦場において真っ先に戦いに身を投じ、戦いの終わりには最後まで残って敵兵を倒すと言うことを示している。つまりここでは新兵衛が戦場においていかに活躍をしていたかを示している部分である。

そのうえ、彼の武者姿は戦場において、水際立った華やかさを示していた。

「水際立った」は、ひときわ目立つという意味。「水際立った華やかさを示していた」ということから、新兵衛の武者姿は戦場において、ひときわ目立った華やかさで、周りとは別格であることがわかる。

火のような猩々緋の羽織を着て、唐冠纒金のかぶとをかぶった彼の姿は、敵味方の間に、輝くばかりの鮮やかさを持っていた。

「猩々緋の羽織」は、猩々(中国の想像上の動物)の毛に似て、黒みを帯びた鮮やかな深紅の陣羽織。「唐冠」は、古代中国の冠に形をまねたかぶと。「纒金」は、唐冠の左右に突き出た金色の装飾具。「輝くばかり」の「ばかり」は程度(〜ほど)を表す。「輝かんばかりの鮮やかさ」だと輝いていないが、「輝くばかりの鮮やかさ」であると実際に輝いている様子がうかがえる。

「ああ猩々緋よ唐冠よ。」と敵の雑兵は、新兵衛の槍先を避けた。

新兵衛を象徴する格好に対して、敵の雑兵が恐れを抱いている様子がわかる。

味方が崩れたたつき、激浪の中に立っいわおのように敵勢を支えている猩々緋の姿は、どれほど味方にとって頼もしいものであったか分からなかった。

「激浪」は、激しい波の意味。「味方が崩れ」るような困難に直面しているとき、新兵衛を、荒波にも負けない「崩れ」ない「いわお」のような頼もしい存在として表現している。また「崩れたつ」の「たつ」とはすっかりや何かをしかけているという意味があるので、ここではすっかり崩れている様子、または崩れかけている様子を表している。

また嵐のように敵陣に殺到するとき、その先登に輝いている唐冠のかぶとは、敵にとってどれほどの脅威であるか分からなかった。

「唐冠のかぶとは、どれほどの脅威であるか分からなかった」という表現から、唐冠のかぶとの脅威の程度が甚だしいことがわかる。また、前文の「猩々緋の姿は、どれほど味方にとって頼もしいものであったか分からなかった。」という表現も同様であり、呼応している。

こうして槍中村の猩々緋と唐冠のかぶとは、戦場の華であり敵に対する脅威であり味方にとっては信頼の的であった。

新兵衛を象徴する格好が、「戦場・敵・味方」にとってどういうものであるのかが、端的にまとめられている。

「新兵衛殿、折り入ってお願いがある。」と元服してからまだ間もない

らしい美男の侍は、新兵衛の前に手をついた。

元服とは男子の成人を示す儀式である。十二〜十六歳くらいで行われることが多かった。「元服してからまだ間もないらしい」とあるので、十二〜十六歳の若い侍であることが分かる。「手をついた」は、敬意を表すため、地面や床に両手をつけること。

「何事じゃ、そなたと我らの間に、さような辞儀はいらぬぞ。望みというを、はよう言ってみい。」と育むような慈顔をもって、新兵衛は相手をを見た。

「我ら」は複数ではなく、私という意味。「さような辞儀はいらぬぞ」とあることから、かしこまったあいさつをするような関係ではないとわかる。「育むような」から若い侍を親のように、我が子を見るように見ていることが分かり、「慈顔」は、慈愛に満ちた優しい顔つきである。新兵衛は若い侍を、我が子のように大変可愛がっていることがわかる。

その若い侍は、新兵衛の主君松山新介の側腹の子であった。

「側腹の子」とは、側室(正妻でない女性)の産んだ子のこと。

そして、幼少のころから、新兵衛が守役として、我が子のように慈しみて育ててきたのであった。

新兵衛と若い侍とは、付き合いが長く、辞儀のいらぬ関係であることがわかる。

「他のことでもおられない。明日は我らの初陣じゃほどに、なんぞ華々しい手柄をしてみたい。については御身様の猩々緋と唐冠のかぶとを貸して

たもらぬか。あの羽織とかぶとを着て、敵の目を驚かしてみとうござる。」

「他のことでもおられない。」は、他のことでもありませんという意味。若い侍にとつて、明日は初めて戦いだから、新兵衛の猩々緋と唐冠のかぶとを着て、華々しい手柄をあげたいと考えている。「敵の目を驚かしてみとうござる。」からは、侍の若さ故の好奇心や大胆さがうかがえる。

「ハハハハ。念もないことじゃ。」新兵衛は高らかに笑った。

「念もない」とは、思慮がないこと。つまり、新兵衛にとつて、若い侍の申し出は、考えるまでもないほど、たやすいことだとわかる。「高らかに笑う」から、声を高く響かせて笑っている様子がわかる。

新兵衛は、相手の子どもらしい無邪気な功名心を快く受け入れることができた。

主君である松山新介の子どもであり、幼い頃からの関係であることから、「快く受け入れることができた」のだと考えられる。

「が、申しておく、あの羽織やかぶとは、申さば中村新兵衛の形じゃわ。そなたが、あの品々を身に着けるうえからは、我らほどの肝魂を持たいではかなわぬことぞ。」と言いながら、新兵衛はまた高らかに笑った。

「かなわぬこと」は、望みどおりにならないこと。新兵衛は若い侍に對して、羽織やかぶとはあくまで形であり、「肝魂」を持つことが必要であると忠告している。この時点で、新兵衛は、自分の功名に對する自負を持ちながらも、形よりもこれまで培われてきた気持ちが大切だ

と考えていることがわかる。

戦いが始まる前、いつものように猩々緋の武者が唐冠のかぶとを朝日に輝かしながら、敵勢を尻目にかけて、大きく輪乗りをしたかと思うと、駒の頭を立て直して、一気に敵陣に乗り入った。

後に出てくる p.3014 の「その日に限って、黒革緋の鎧を着て、南蛮鉄のかぶとをかぶっていた」の一文との比較。猩々緋の武者の恰好がいつもと変わらないことをあえて書く事で、いつもと違う中村新兵衛を際立たせている。

その日に限って、黒革緋の鎧を着て、南蛮鉄のかぶとをかぶっていた中村新兵衛は、会心の微笑を含みながら、猩々緋の武者の華々しい武者ぶりを眺めていた。

「会心の笑み」というのは心から満足している様子を表している。「微笑」もにっこり笑っているという意味を含んでいるので、ここでは戦場で活躍する猩々緋の武者の姿に満足していることが分かる。

そして自分の形だけすらこれほどの力を持っているということに、かなり大きい誇りを感じていた。

「自分の形だけすら」は「自分の形だけですら」といつていることが予想される。つまり自分の形である猩々緋の姿だけでもこれほど敵兵に影響を与えるのであるから、自分の実力はもつとすごいものであるという新兵衛の自信が窺える。

彼は、二番槍は、自分が合わそうと思ったので、駒を乗り出すと、一文

字に敵陣に殺到した。

一文字という言葉から、新兵衛の覇気や意気込みが感じられる。また殺到という言葉は多数の人が押し寄せるといふ表現である。ここでは新兵衛の兵たちが大勢で進撃したと考えられる。しかし主語は「彼」なのに「殺到した」という表現はおかしい。なので新兵衛が多数の兵に匹敵する力を持っていることを表していると考えられる。

猩々緋の武者の前には、戦わずして浮き足立った敵陣が、中村新兵衛の前には、びくともしなかった。

「浮き足立った」と「びくともしなかった」と対比させることで、猩々緋の武者と黒革緋の武者の姿が違う事での敵兵の様子の違いを強調している。

いつもは虎に向かっている羊のようなおじけが、敵にあった。

「羊のようなおじけ」から、戦意が無く、逃げ惑うしかない敵兵の様子がうかがえる。

今日は、彼ら是对等の戦いをする時のように、勇み立っていた。

敵兵が黒革緋の武者を見て、「羊のような」ではなく、「対等の戦い」をしたことから、これまでは新兵衛の形におびえていたことが分かる。

どの雑兵もどの雑兵も十二分の力を新兵衛に対し発揮した。

「どの雑兵もどの雑兵も」から敵兵の誰もが新兵衛と気付いていないことが分かる。

新兵衛は必死の力を振った。

普段の新兵衛ならば全力を出さずとも敵兵を倒すことができた。

手軽に兜や猩々緋を借したことを、後悔するような感じが頭の中をかすめた時であった、敵の突き出した槍が、緋の裏をかいいて彼の脾腹を貫いていた。

「後悔した」ではなく「後悔するような感じ」から、新兵衛は後悔しているとはっきりとは思っていないことがわかる。そこから新兵衛の普段の時とは違う必死さを窺うことができる。

三 考察

○色が象徴するもの

本作品において、何度も登場するのが「猩々緋の羽織」と「唐冠纓金のかぶと」である。また、これらと対照的に登場するのが、「黒革緋の鎧」と「南蛮鉄のかぶと」である。猩々とは、中国の伝説上の生き物であり、明の『本草綱目』によると、猩々は人面人足で髪が長く、鮮やかな赤い体毛を持ち、犬のように吠え、人語を解し、酒を好むとされている。また、その血の色がとても赤いことから、猩々緋という色名が生まれたとされている。このことから、本文中に出てくる「猩々緋の羽織」は真っ赤な羽織ということになる。この猩々緋という色が象徴しているのは、華やかさ、敵への脅威、味方への信頼であった。この猩々緋と同様に扱われているのが、「唐冠纓金のかぶと」である。しかし、本文中で「唐冠纓金のかぶと」と書かれているのは一度だけで、それ以外は「唐冠のかぶと」や「唐冠」と書かれている。同様に

「猩々緋の羽織」という表現も、本文中では一度しか登場せず、それ以外は「猩々緋の武者」あるいは「猩々緋」と書かれている。これらことから、華やかさ、敵への脅威、味方への信頼を象徴しているものは、「唐冠」と「猩々緋」であると言える。また、この二つは誰が身につけていても、同じものを象徴することが文中から読み取れる。つまり、「猩々緋の羽織」を身につけた武者は敵に恐れられ、「黒革緋の鎧」を身につけた武者は脅威の対象にならなかった。それは、「黒革緋の鎧」の武者が多くいる中で、脅威の象徴である「猩々緋の羽織」の武者は、その羽織の色だけで、他とは違った存在であることを強調しているからであろう。

ここで注目したいのは、「猩々緋」という色についてである。なぜ、「赤い羽織」や「深紅の羽織」などの表現ではなく、「猩々緋の羽織」という表現を使っているのか、また、それが文中でどのような働きをしているのかについて考えていきたい。まず、猩々緋の羽織と言われて、猩々緋の具体的な色を想像できる人は多くないだろう。しかし、猩々緋の羽織という表現の前に、「火のような」と書かれていることから、赤色に近い色であるということは想像できる。しかし、あえて「猩々緋」と表現することで、この色が、戦の場面において珍しい色であることが強調されるのではないだろうか。文中でもあったように、猩々緋の羽織の武者は戦場で目立っており、敵には恐れられ、味方には頼りにされていたとわかる。また、前に述べたように、猩々とは中国の伝説上の生き物であり、その色が由来となっている猩々緋という色もまた、戦において伝説に残るような強さの象徴としての意味があるのではないだろうか。

○古典作品「松山新介の勇将中村新兵衛が事」との比較

菊池寛の小説「形」は、古典作品の「松山新介の勇将中村新兵衛が事」という話をもとにして書かれたとされる。ここでは、古典作品と比較することによって、小説「形」の表現の特徴について考える。

松山新介の勇将中村新兵衛が事

摂津半国の主松山新介が勇将中村新兵衛、たびたびの手柄を顕しければ、時の人これを槍中村と号して武者の棟梁とす。羽織は猩々緋、かぶとは唐冠金纓なり。敵これを見て、「すはや例の猩々緋よ、唐冠よ。」とて、いまだ戦はざる先に敗して、あへて向かひ近づく者なし。ある人強ひて所望して、中村これを与ふ。その後、戦場に臨み、敵中村が羽織とかぶとを見ざるゆゑに、競ひかかりて切り崩す。中村矛を振つて敵を殺すことそこばくなれども、中村を知らざれば敵恐れず。中村つひに戦没す。これによつて曰はく、「敵を殺すの多きをもつて勝つにあらず。威を輝かして気を奪ひ、勢を撓すことわりを曉るべし。」と。

出典 「常山紀談」

「松山新介の勇将中村新兵衛が事」は、「常山紀談」に収められた話である。「常山紀談」は、随筆とも説話集ともいわれるもので、戦国時代から江戸初期までの武人の逸話を収めている。著者は、岡山藩士・儒学者の湯浅常山。原形は一七三九年に成立し、完成は一七七〇年とされる。基本的には史実を題材としているが、人名や地名などが史実と異なるものもある。

それでは、古典作品との違いを見ていく。まず、古典作品では「ある人」としか書かれていない人物が、「形」では「若い侍(美男の侍)」として、その言動が詳しく描かれている。彼が羽織とかぶとを借りる場面でのやりとりは、会話文によって描かれており、ここから新兵衛と若い侍の人物像を読み取ることができる。新兵衛の言葉からは、力強く自信に満ちた人柄を、若い侍の言葉からは、若さ故の好奇心や大胆さを感じ取れる。また、「育むような慈顔」という新兵衛の表情から、二人の関係も読み取ることができる。古典作品は淡々と事実を説明しているのに対して、「形」は人物像が想像できるような表現が加えられているのが特徴である。

次に、「形」には、新兵衛の心情描写があるという点である。例えば、「自分の形だけですらこれほどの力を持っているということに、かなり大きい誇りを感じていた。」や、「手軽にかぶとや猩々緋を貸したことを、後悔するような感じが頭の中をかすめた」である。新兵衛の心情が描写されることで、新兵衛の人物像がより鮮明になっている。また、心情の変化も捉えやすい。そして、このような描写があることで、新兵衛が「形」(猩々緋やかぶと)の持つ影響力に気づくという、主題も明らかになっている。

一方、古典作品の最後の一文には、一つの教訓が述べられている。「敵を殺すの多きをもつて勝つにあらず。威を輝かして気を奪ひ、勢をみだすことわりを曉るべし。」の部分である。この教訓は、「形」にはない。また、古典作品では「戦没す」と新兵衛の死がはっきりと書かれているが、「形」では、「槍が、緘の裏をかいいて彼の脾腹を貫いていた」としか書かれていない。「形」は、はっきりと結末を描かないことで、物語に余韻を残す書き方になっている。

以上のことから、会話文や表情の描写によって人物像が鮮明に描かれていること、新兵衛の心情描写によって主題が捉えやすくなっていること、作品の最後に一つの教訓を示すことなく解釈を読み手に委ねていることがわかる。

○戦国時代の合戦の仕方から見る表現分析と矛盾

「形」において合戦の表現がたくさん見ることができるといえる。例えば「嵐のように敵陣に殺到するとき、その先登に輝いている唐冠のかぶとは、敵にとってどれほどの脅威であるか分からなかった」、「猩々緋の武者は槍をつけたかと思うと、早くも三、四人の端武者を、突き伏せて、また悠々と味方の陣へ引き返した。」など、様々ある。ここで少し当時の合戦の仕方について触れていきたいと思う。

「形」の舞台となっているのは、登場人物の出没年から大体「1570」だと予測される。つまり戦国時代である。この頃の合戦の仕方は、個人で戦っていた平安、室町と違い「備」と呼ばれる軍団を編成して戦を行っていた。そのときに重要となっていたのが槍部隊である。戦いにおいてリーチが長く集団で有利であった槍が戦いの多くを占めていた。そこから出てきたのが「一番槍」という言葉である。本文中でも「二番槍」という言葉が出てくるが、一番槍というのは合戦において、一番最初に敵と槍を合わせる事をいい、合戦での勝敗は関係なくその勇気を賞賛される役割である。二番槍はその次に賞賛される役割である。つまり一番槍というのは戦場において一番死ぬ確率が高いと言うことである。ここで若い武者の会話と行動に注目したい。若い武者は中村との会話で「明日は我らの初陣じゃほどに、なんぞ華々しい手柄をしてみたい。」と述べ、次の日の戦において一番槍になっている。

ここから考察するに、若さ故の好奇心に加え、初陣での生存率を上げるために中村に『形』を借りたとも考えられるのではないだろうか。また「形」における矛盾点についても考察していきたいと思う。先ほど述べたようにこの時代は集団戦で行われている。「先登」はいちばん先に行くこと。また、いちばん先に到着することである。つまり単騎で敵陣に突っ込んで入ることが分かる。これは戦略的に考えると自殺行為である。先ほどと同じように原典と比較してみると、このような描写は全くない。加えて言うなら侍大将という肩書きも加えられている。つまりより形と内容を強調した文章となっている。

